

## 「外郎売り」の本文

拙者親方と申すは、お立合の中に、御存じのお方もござりましようが、お江戸を発つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへおいでなさるれば、欄干橋虎屋藤衛門只今は剃髪致して、円斎となのります。

元朝より大晦日まで、お手に入れます此の薬は、昔ちんの国の唐人、外郎という人が朝へ来り、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。

依つてその名を帝より、とうちんこうと賜わる。

即ち文字には「頂き、透く、香い」とかいて、「とうちんこう」と申す。

只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出だし、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、平仮名をもって「ういろつ」と記せしは親方円斎ばかり。

もしやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治にお出でなさるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。

お登りならば右の方、お下りなされば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存知ない方には、正身の胡椒の丸香、白河夜船、さらば一粒食べかけて、その気見合いをお目にかかけましょう。

先ずこの薬をかように一粒舌の上のせまして、腹内へ納めますと、イヤどうも云えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかになりて、薰風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。

魚鳥、茸、麵類の食合わせ、その他、万病速効ある事神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、錢ゴマがはだして逃げる。

ひょっと舌がまわり出すと、矢も盾もたまらぬじゃ。

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるわ。

アワヤ咽、さたらな舌に、カヤサ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あかさたなはまやらわ、おこそこのほもよるを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、盆米、盆ごぼつ、摘蓼、摘豆、つみ山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米の小生がみ、繻子ひじゅす、繻子、繻珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい、子かへい親かへい、ふる栗の木の古切口。

雨合羽か、番合羽か、貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、しっかわ袴のしっぼころびを、三針はりながにちよっと縫って、ぬつてちよっとぶんだせ、かわら撫子、

野石竹。

のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。

一寸先のお小仏におけつまずきやるな、細溝にとじよによろり。

京のなま鱧奈良なま学鱧、ちよつと四、五貫目、お茶立ちよ、茶立ちよ、ちよつと立ちよ  
茶立ちよ、青竹茶筴でお茶ちよつと立ちよ。

来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百  
本。

武具、馬具、ぶぐ、ばぐ、三ぶぐばぐ、合わせて武具、馬具、六ぶぐばぐ。

菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

麦、こみ、むぎ、こみ、三むぎこみ、合わせてむぎ、こみ、六むぎこみ。

あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

向こつこの胡麻がらは、荏のこまがらか、真こまがらか、あれこそほんの真胡麻殻。

がらびい、がらびい風車、おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼして又こ  
ぼした。

たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぼ、たつぼたつぼ一丁だこ、落

ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、五徳、鉄球、かな熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎きす、中にも、東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやる、かの頼光のひざもと去らず。

鮎、きんかん、椎茸、定めて後段な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地。

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、こすくって、こよこせ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は、走って行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原とうちん香、隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸の花いろいろ、あれあの花を見てお心をあやわらぎやといつ。

産子、這子に至るまで、この外郎の御評判、ご存知ないとは申されまいまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼつぼつまゆに、臼、杵、すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目を弛して今日お出でのいずれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱり、東方世界の薬の元々、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬って、いろいろは、いらっしやりませぬか。